

ハーブ・生薬・サプリメントの安全性確保とモニタリング手法

鳥居塚和生,^{*,a} 津谷喜一郎^b**The Safety Securing and the Safety Monitoring of Herbal Medicines,
Finished Herbal Products and Supplements**Kazuo TORIIZUKA^{*,a} and Kiichiro TSUTANI^b

^aLaboratory of Pharmacognosy and Phytochemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Showa University, 1-5-8 Hatanodai, Shinagawa-ku, Tokyo 142-8555, Japan and ^bDept. of Drug Policy and Management (DPM), Graduate School of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

近年、ハーブ・生薬・サプリメント・健康食品などの消費が急速に増加してきている。それぞれが自分の健康に気遣っていることと思われるが、一方では「健康によい」あるいは「天然由来だから」とか「自然なものだから」という言葉に惑わされて、無評価で摂取している例も少なくない。その背景には、各種の情報が Web 上であふれ、瞬く間に情報が広がることや、それらの製品が Web 上などで極めて容易に入手可能な状況になっていることがあると思われる。しかし「自然のものだから安全性が高い」というイメージだけが先行している状況や、質や内容が吟味されていない情報の氾濫の中では、有害事象を引き起こす可能性の高い物質を含んだ製品を知らずに購入し服用してしまう危険性が高い。またサプリメント・健康食品という枠の取り扱いであるため、原料や表示などの品質を確保する上での問題点も残され健康被害や有害事象の発生が懸念される。

安全性確保のために様々なメディアからの情報を統合的にモニタリングし、正しい情報や警告を発信することが、薬学の果たすべき責務の 1 つといえる。また原因物質をいち早く解明し最適の対処を提示できるシステムの構築も課題であろう。そのためには情報処理や医療系の分野は元より、物質の解析

と対応策の構築に、生薬学や天然物化学など基礎系分野の果たす役割は今後も大きいといえる。

このような点を踏まえて、国立医薬品食品衛生研究所生薬部長の合田幸広氏、日本健康食品規格協会理事長の大濱宏文氏、昭和大学薬学部毒物学教授の吉田武美氏、医学中央雑誌刊行会の豊玉速人氏といった各分野のエキスパートにシンポジストをお願いした。またオルガナイザーの 1 人である津谷（東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学）もシンポジストとして講演を行った。本シンポジウムにおいて、合田氏からは安全性確保と基原の重要性を、大濱氏からはアメリカ、EU のサプリメントに対するレギュレーションをお話頂いた。また吉田氏からは食物テロ発生の可能性とそれに対する対処についてお話頂いた。さらにより精度の高い情報収集と発信のシステム構築と展望について豊玉氏にお話し頂いた。津谷からはレギュラトリーサイエンスについてモニタリングの取り組みの現状を報告した。内容が多肢に渡り、2 時間のシンポジウムという限られた時間内には収まり切れなかったものであった。

今回、薬学雑誌編集委員のご理解もあり、またシンポジスト各位のご助力で、改めて誌上シンポジウムとして講演内容を元にまとめて頂いた。ハーブ・生薬・サプリメント・健康食品など健康の維持増進や疾病のリスク低減で、今後も重要な役割を果たすものと思われるが、一方で誤った使用による有害事象や、意図を持った食品テロなどに対して、どのように対応していくべきなのかなどの課題や問題点により浮き彫りされることを期待している。また、薬

^a昭和大学薬学部生薬学・植物薬品化学（〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8）、^b東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学（〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1）

*e-mail: k-tori@pharm.showa-u.ac.jp

日本薬学会第 127 年会シンポジウム S9 序文

学においていかに対処し責務をいかに果たしていくかを考える機会になればと念じている。

謝辞 この研究の一部は平成 18 年度文部科学

省ハイテク・リサーチ・センター整備事業の助成を受けた昭和大学大学院薬学研究科ハイテクリサーチセンターの支援を受けた。